

推薦書

大澤真木子先生は現在東京女子医科大学名誉教授で、同小児科の主任教授および医学部長を歴任、日本小児神経学会理事長、日本てんかん学会理事長、Infantile Seizure SocietyのChair personも務められ、小児科および小児神経学の教育、研究と診療において大きな業績を残されました。大学3年生の基礎医学の時間に前国際小児神経学会(ICNA)理事長の故福山幸夫先生の基礎医学と臨床の関連性について言及された講義から、基礎医学を学ぶ意義に深い感銘を受け、病院実習時に初診患者さんの予診、診察、診断をつける故福山幸夫先生の理路整然とした考え方に感激されたそうです。そのため1972年に東京女子医科大学卒業後、直ちに同・小児科学教室に大学院生として入局されました。そこで当時の^故福山幸夫教授のご指導のもと研鑽を積まれ、1983年には同科講師に就任されました。福山先生の下で長きにわたり医局長を勤められましたが、福山先生の幅広い国際的な活躍を支えるため、医局マネジメントなどご苦労は並大抵ではなかったはずで、福山先生は国際性を重視され小児神経学会英文誌Brain Dev発刊、ICNA理事長就任、ICNA東京開催、Infantile Seizure Society 開催など尽力されましたが、大澤先生はこの間すべての学会開催を実質上采配されておりました。福山先生の著名な国際的な活躍は、大澤先生の支えなくしてはなかったものと思います。

1987年には東京女子医科大学^故吉岡守正学長の命を受け、カナダ McMaster 大学へ医学教育視察のため半年間留学され、その後、東京女子医科大学での Tutorial 教育導入に情熱を捧げられました。1990年には助教授になられましたが、学内教育向上の功績により、2018年 Healthy Society 賞を受賞しておられます。1994年には東京女子医科大学小児科主任教授に就任されています。私は、その当時「てんかん診療、脳波室の主任を務めるように」と正式な役割をいただいたのを今でも覚えております。その後の私のてんかん研究を長く支えていただきました。ご自身は、Tutorial 委員会委員長、人間関係教育委員会委員長、教務委員長を務められ、2008年には、医学部長に就任されています。またほぼ同時に日本小児神経学会の理事長に就任されています。

先生の研究成果は枚挙にいとまがありませんが、とくに小児の神経筋疾患の患者さんの診断とケアの面で活躍をされ、福山幸夫先生の教育・研究と診療を支えてきました。特に重要なものは「福山型先天性筋ジストロフィーの臨床的・病理学的研究」「先天性強直性ジストロフィーに関する研究」であります。後者により2007 Gaetano Conte Prize (Gaetano Conte Academy より)を受賞しておられます。他、福山型先天性筋ジストロフィー症のてんかん合併調査、點頭てんかんの研究調査、ポケモン発作に関わる全国調査、Rasmussen 症候群の全国調査、22q11.2 欠失症候群に関する臨床研究、Williams 症候群の臨床心理学的研究、ミトコンドリア異常症など様々な神経疾患について指導されてきました。

2002、2003年 Infantile Seizure Society の大会長も務められました。2017年に Ambassador for epilepsy award by International league against epilepsy & International bureau against Epilepsy 受賞しておられますが、これは Infantile Seizure Society などにおける実践的な国際貢献によってもたらされたものと考えられます。日本小児神経学会理事として薬事委員会委員長など各種委員長の歴任や、厚生労働省の「医療上の必要性の高い未承認薬・適応外薬問題検討委員会」などの構成員としての尽力を通して、多くの抗てんかん薬をはじめとする難治小児神経疾患治療薬の日本への導入・承認を推進されました。さらに 35回(2001年)鈴木二郎先生が日本てんかん学会を開催されたときに副会長を拝命したことを契機に、日本で

んかん学会でも理事として、てんかん研究編集委員、Jun & Mary Wada 賞選考委員会、分類用語委員会委員、薬事委員会委員、プログラム委員会委員として貢献されています。48 回日本てんかん学会でも私の大会長就任にご尽力ください、自らは副会長として大会を支えていただきました。

当直医として一晩に複数のけいれん重積の患者さんに遭遇し、その治療の重要性を痛感していた大澤先生は、2002 年に「厚生労働科学研究補助金、効果的医療技術の確立推進臨床研究事業」として「小児のけいれん重積に関する薬物療法研究」の主任研究者として采配を振るわれ、多施設共同研究としてミダゾラム (MDL)、リドカインの有効性、安全性に関する研究をまとめられました。その研究成果をもとに 2005 年に「小児のけいれん重積状態の診断・治療ガイドライン(案)―よりよい治療法を求めて―」を作成されています。この「ガイドライン案」は、日本てんかん学会評議員、日本小児神経学会評議員にコメントを依頼し、小児神経学領域におけるエキスパートオピニオンとして位置づけられました。その後 林 北見博士を始めとする小児けいれん重積治療ガイドライン策定ワーキンググループにより、小児けいれん重積治療ガイドライン 2017 として診断と治療社より発行されました。このお仕事は、日本における小児のてんかん発作重積症に対する標準化とミダゾラム早期導入に大きな影響を与えました。

日本てんかん学会理事長の時に学会は 50 周年を迎え、「てんかんの理解を深め、患者が制約を受けない社会をつくる、臨床に強い医師を育て適切な治療を推進する」ことを目的と述べられています。大澤先生は、常に患者とその家族に寄り添う医療の姿勢を貫かれました。先生の温かい診療姿勢により筋ジストロフィーの患者さんご自身から、あらかじめ剖検を許可して下さっていた方もおられました。2013 年 10 月から 4 年間日本てんかん学会理事長を務められ、その間 2014~2017 年には、高知県高知市、石川県加賀市、和歌山県和歌市、茨城県水戸市の各支部主催の全国大会で「…笑顔で生きる…」輪に入れ、「医師は患者さんに教育して頂く」旨の祝辞を述べられ、世界てんかんの日の記念イベントは学会と協会とで開催し、一般の方向けに「発作の対処法」を含む啓発的講演をされるなど患者教育に大きな足跡を残されました。

先生は五感を研ぎ澄まされて回診に臨み、ベットサイドの難治てんかんを初めとする初診患者さんおよびご家族の様子を一見されるだけで、その基礎疾患の診断や心理背景への大きな step としての示唆を与えてくださいました。今ではてんかんの遺伝子診断が盛んになって難治性てんかんの基礎疾患に重点が起これるようになっていますが、その当時から顔貌や四肢の奇形や神経学的所見からてんかんのみでなくその基礎疾患や患者全体にアプローチするようにおっしゃっておいりました。「現在は治療法がない病気でも、その患者さんの病状がどこまでわかって、どこからは分からないかを明確にしてください。女子医大の小児科に関わったことで患者さんが何らかのメリットを得られるように意識して」が口癖でした。定年退職のときは最後の回診の日まで退院延期を希望された患者・家族の方々もおられたことは大変印象深く、病で悩み苦しむ方々からこれほど慕われる教授は少ないのではないかと思われました。先生はその後ろ姿により後進の医師に対して臨床医のあるべき姿を示して下さいました。大澤眞木子先生はこのようにてんかんに対して小児神経学をベースとした診断、治療研究のみでなくてんかん患者指導、教育などの包括的な支援、多くの学会活動を通しててんかん教育の普及などの貢献は大なるもので、てんかん治療研究振興財団研究功労賞にふさわしいと考え、推薦申し上げます。

東京女子医科大学名誉教授
小国弘量